造仏における古代朝鮮三国と日本の遣隋唐使

上　原　一　明

Making a Buddhist image on
three ancient Korea and Japanese envoy to the Sui and Tang

Kazuaki UEHARA

(Received September 25, 2009)

はじめに

日本の初期仏像において、古代朝鮮三国である高句麗・新羅・百済からの影響は直接的であり尚且つ指導的であった。これら古代朝鮮三国からの仏教公伝と造仏の状況について述べ、更に日本における仏教の受容について、朝鮮三国からの像請来と隋唐時代に派遣した遣隋使及び遣唐使に関して、造形様式変化の一考察を述べる。

1、古代朝鮮三国における仏教公伝と造仏

(1) 高句麗と新羅の「国家仏教」

４世紀から７世紀の朝鮮半島は、高句麗・新羅・百済の三国が鼎立していた。当時の中国大陸における五胡十六国・南北朝・隋・唐時代であり、日本における古墳時代から飛鳥時代に相当する。朝鮮半島にも中国仏教が伝わるのだが、その朝鮮の三国中最も早い時期に仏教が公伝したのは中国大陸北部に隣接する高句麗であった。「三国史記」によると、372年（小獣林王２年）に前秦王・苻堅（世祖宣昭帝、在位357年～385年）が使者及び僧・順道を高句麗に遣わし、仏像と経典を送ってきたとある。[1]　前秦は五胡十六国の一つであり、後趙・後秦・北涼と共に仏教が盛んであった。前秦は中国大陸北部を領土とし、西域の門戸である敦煌も境域内であった。当時の高句麗は前秦と冊封関係であったため、宗主国である前秦から伝えられた仏教を拒むことは出来なかった。高句麗における仏教の受容は、宗主国と従臣国間の「下賜」と「受領」であり、「北朝仏教」であった。[2]　その後高句麗では伽藍の建立が相次ぎ、それに伴う仏像の造像も行われた。

北魏による雲岡・龍門の造窟後、東西両魏、北斉、北周に至るまで「北朝仏教」としての北魏様式の仏像が制作されていたが、太原府の西南方天龍山石窟内の仏像あたりから徐々に中国独自の丸みを帯びた様式に変化していった。やがてそれらは朝鮮半島の仏像彫刻界にも浸潤していくこととなる。[3]　高句麗における初期仏教が北朝仏教であったとすれば、自ずとその形状はガンダーラや中央アジア及び西域を起源とする北涼系を代表とする交脚菩薩の容貌をみる系統であり、北魏様式にみられるアルカイックスマイルの容貌であったと考えられる。そして更には、天龍山様式にみられる中国風の仏像も制作されたものと思われる。しかし残念ながら、高句麗時代及び新羅や百済と合わせた三国時代の仏像は僅かしか現存していない。高句麗の金銅半跏思惟像（６世紀後半）や新羅の石窟庵の石像釈迦如来坐像（８世紀後半）、金銅弥勒菩薩半跏思惟像（韓国・国立中央博物館蔵、韓国の国宝83号）、韓国に現存する最古の木製仏像

である高麗時代の海印寺本尊毘盧遮那仏（883年制作）などが現存しているが、その数は決して多くない。[4]

高句麗と百済は中国に対して、それぞれ陸路と海路により情報の流通が行われていたが、朝鮮半島の南東に位置する新羅は直接中国に行き来する術がなく、仏教も高句麗から間接的に伝わった。新羅の仏教公伝は、高句麗から来た僧・墨胡子が地方の一住民のところに伝えられ、その影響を受け新羅の宮廷に入った。「三国志記」の中には、宮廷に受け入れられるまでの経緯を次の物語として伝えている。

> 法興王が仏教の興隆を意図したところ、群臣の反対にあった。僧の風姿が異様であり、議論も奇詭で常軌でない、というのが反対の理由であった。仏教に帰した近臣の異次頓が法興王の立場を察し、自分を刑に処することにより、衆議を一変せしめたい旨を法興王に進言した。異次頓を斬ったところ、湧き出る血は乳のように白色であり、この異事に驚いた群臣は、仏教反対の強硬な態度を変え、仏教を非難しなくなったという。[5]

このように新羅の法興王（在位514年～539年）は、貴族層の激しい抵抗に遭いながらも国家的な「仏法興隆」に向かった。新羅の仏教は即ち高句麗を介した「北朝仏教」であった。

中国における北朝仏教は、国土と国民に君臨する皇帝を中心とする「国家仏教」であり、南朝仏教は貴族層を受容者とする「氏族仏教」が根底にあった。朝鮮半島における仏教は、先述のように高句麗と新羅が北朝仏教系の「国家仏教」であり、百済は南朝仏教系の「氏族仏教」であったと考えられる。この差異はそのまま造仏の様式や造像方法にも直接的な影響を与えていることを意味する。即ち高句麗と新羅は国王が主体となり、国家仏教として大規模な伽藍を建立し、丈六仏のような大きな仏像が制作されていたと考えられる。その具体例として挙げられるのは、法興王の意を受け継ぎ、石窟庵（751年）の釈迦如来坐像を造仏させた真興王（534年～576年）による多くの仏教施設の建立である。更に真興王は皇龍寺に丈六金銅仏（574年）を造像し、新羅仏教の発展に貢献した。このような大規模な伽藍の建立と巨大な丈六仏の制作は、国家レベルの大事業であることから北朝系の「国家仏教」の段階であったといえる。

(2) 百済の「氏族仏教」

「三国史記」によると百済に仏教が公伝したのは384年（枕流王元年）であり、それは中国南朝の斉或いは梁から伝えられたといわれ、摩羅難陀が入国して仏教を伝えた。斉に赴いた百済使は三回、梁に赴いた百済使は五回を数えており、百済の仏教伝来は高句麗領内である陸路を避け、海上を通じて成された。[6] 梁は南朝仏教芸術発展の最盛期であり、他の歴代南朝である宋や斉、陳と比較しても、数多くの仏像を制作していた。しかし、南朝の漢族社会において仏法と王法は融合せず、仏教は貴族層を受容者とする「氏族仏教」として広がっていた。したがって仏像制作においても小金銅仏や壇像等、念持仏程度の小規模のものであったと考えられる。百済における仏教の系統は「南朝仏教」であり、南朝の仏像の特徴である「秀骨清像」の趣を成すものであったものと思われる。

百済における仏教は貴族層による知識階級を受容者として広まり、数多くの念持仏が制作されたと考えられる。近年これらのことを裏付ける、百済と倭国に関係するある重要なものが出土された。2008年10月23日、熊本県北部にある古代山城跡である鞠智（きくち）城跡貯水池の遺構北端から青銅製の菩薩立像が出土された。その特徴から朝鮮半島の百済で７世紀後半に制作されたものと判断されている。百済の青銅仏像は日本国内では初めての出土である。菩薩像は全長12.7cm、幅３cmであり、頭飾と肩から足にかけて垂らした天衣を着け、側面から見ると

S字型の姿勢であり、[7]足元には台座に固定するための枘(ほぞ)がある。枘の大きさからみて650年～675年に百済で制作されたことを示す特徴であるとみられる。年代から見る限り、百済滅亡(660年）前後に亡命した百済の貴族の念持仏であると判断される。古代史資料「六国史」による記述や百済系瓦の出土例などからみて、鞠智城は百済の亡命貴族の指導の下で築城されたと考えられていることからも、百済の貴族の念持仏であったことが実証される。[8]　このように、百済における仏教は南朝系の「氏族仏教」の段階であったことを伺わせる。

田村圓澄氏は、更にこれら仏教の二つの異なる受容形態である「国家仏教」と「氏族仏教」をより具体化する形で、前者を「伽藍仏教」と呼び、後者を個人単位の仏教信仰を指す「私宅仏教」と呼んでいる。「伽藍仏教」とは、大規模な仏教施設を建設出来得る国力を有する強大な国家による仏教興隆を意味する。それは専制君主制に於ける皇帝或いは国王の勅命による仏教寺院の建立及び造仏であり、国費を注ぎ込むことにより一流の仏師及び工人達を召集することが出来る。彼ら仏像制作者は仏教の教義内容を十分に理解し、尚且つ組織的彫刻制作方法を熟知した者でなければならない。彼らには非常に完成度の高い仏像を造ることが求められ、そして彼らはそれに十分応え得る仕事を遂行する。仏像を制作する仏師達も潤沢な設備と報酬を手にすることにより、更に造形感覚と造形技術を発展させた。そして従来の北朝様式に改良と時代に即した創作を加え、その国独特の様式を確立していく環境が生まれてくる。前出の高句麗・金銅半跏思惟像や新羅・石窟庵石像釈迦如来坐像などは、北朝様式から朝鮮特有の造形感覚に移行しており、これらの状況をよく示している。

(3)　花郎と半跏思惟像

新羅では、真興王の37年（576年）に青年貴族の集団を国政に取り組み、国家的な組織として機能させた。その青年貴族集団の中から美貌の青年貴族を選び、「花郎（ハラン)」と名づけた。そして、国王はこの花郎集団を領導することにより新羅の結束を固めるのを期待した。花郎集団は儒教を背景にする教育訓練組織であり、宗教的機関であった。道教的不老長寿や神仙思想にも関心を寄せていたが、当時の中国や朝鮮半島三国において盛んに行われた弥勒信仰との結びつきが、花郎のイメージと合致した。弥勒信仰とは、釈迦入滅後56億７千万年後の遠い未来に、天上の兜率天から民衆を救済するという未来仏信仰であり、若い美男子である青年貴族の花郎集団の姿に、弥勒菩薩を重ね合わせたものであった。当時の新羅は北方に高句麗、西方に百済があり、度重なる戦乱により民衆は苦しんでいた。その民衆の期待に応えるよう花郎集団は団結し、高句麗や百済との争いに臨んだ。この「花郎」の存在は新羅だけであり、高句麗や百済にはこのような組織・集団は存在しない。[9]

新羅の「花郎」＝「弥勒信仰」は、そのまま仏像として投影されている。その投影された仏像とは半跏思惟像であり、出家前の若き日のゴータマ・シッダルタ（悉達太子）が、生・老・病・死という人生の問題に苦悶している姿を表したものである。半跏思惟像は一般的には腰巻を広げた蓮座に腰掛け、右足を左腿の上に組み、その右足を押さえるように左手を添え、右手第二指及び第三指を右頬にあて、ややうつむき加減で思惟にふける様子を表した像である。既にガンダーラにおいても半跏思惟像は制作されているが、中国大陸においても敦煌や雲崗などにも伝わっている。半跏思惟像は交脚倚坐菩薩像と並び、弥勒菩薩像として造形化されることもある。雲崗や龍門の仏像の中に、中尊を交脚倚坐弥勒菩薩像の脇侍として、左右に一対の半跏思惟像を配した三尊形式の仏像がある。中尊の交脚倚坐弥勒菩薩像を兜率天で説法形をあらわす現在仏とすれば、左右の一方が過去仏としての悉達太子であり、もう一方が未来仏として

の弥勒となり、過去・現在・未来の三世にわたる仏の救済を意味することになる。[10]

1954年河北曲陽修徳寺から出土した「鄒廣壽造思惟菩薩石像」は東魏・興和２年（540年）の制作で、白大理石で造られている。[11] この河北曲陽の半跏思惟像の造形的要素は、新羅時代に制作された金銅弥勒半跏思惟像（韓国・国宝78号、伝安東出土、韓国国立博物館蔵）の源流であるとみられる。このように中国から出土された半跏思惟像が、弥勒信仰の流行により多くの仏像が制作され、多くの経典と共に朝鮮半島にもたらされていたはずである。そして中国大陸で多く造られた塑像仏や石仏、金銅仏、壇像の制作方法及び技法が伝えられ、新たに朝鮮半島で制作されたものと思われる。韓国・国宝78号の弥勒半跏思惟像が中国の鄒廣壽造思惟菩薩像の系統、即ち北魏系統の様式を持つものであるが、韓国・国宝83号の弥勒半跏思惟像は、北魏様式とは趣を異にする簡素で伸びやかな朝鮮様式と言えるものとなっている。

日本の京都太秦にある広隆寺・宝冠弥勒（半跏思惟像、日本・国宝第１号）は、弥勒菩薩半跏思惟像（韓国･国宝83号）とその形状が類似していることで知られている。宝冠の形や姿勢、慈悲に満ちた趣などの共通点が多い。前者が木彫製で後者が金銅製であり、使用された材料は異なるが、同一の系統か若しくはどちらかを敬った模刻であるという考察も成り立つ。新羅系帰化人・秦氏の氏寺である広隆寺の宝冠弥勒は、その使用された赤松という素材や造像方法からみても極めて特殊であるが､その美しく若々しい半跏思惟像の姿から､「花郎」＝「弥勒信仰」＝「聖徳太子」へとつながる。広隆寺に深く関係する聖徳太子（574年～622年）を悉達太子と重ねたものであり、新羅的弥勒信仰の日本的解釈であると考えられる。

(4) 統一新羅の塑造仏

やがて百済が滅亡（660年）し､高句麗も唐と新羅の連合軍による攻撃によって滅亡（668年）した後、統一新羅（668年～935年）が朝鮮半島を統治した。その後も国力を高めると同時に仏教も興隆し、多くの寺院建立や仏像造像が盛んに行われた。

近年、朝鮮半島における当時の仏像の中で、塑造仏に関する新たな発見があった。「朝鮮仏像の中に隠れていた統一新羅仏像」として次のように伝えている。

> 泥で作られた仏像に彩色を加えた統一新羅時代の仏像３点が初めて見つかった。慶州祇林寺（住持ジョン・グァン）は、去年12月末、薬師殿にあった薬師仏と文殊菩薩、普賢菩薩の塑造三尊仏を漆塗りする過程で、数回塗った跡があることを確認し、これを順次取り除いた結果、統一新羅全盛期の時に造成された塑造仏を発見したと18日、明らかにした。このようにして現われた統一新羅時代の原型仏像は、木造に土と違う材料を交ぜて作った後、その表面に黄色や緑系統の彩色を加えたことがわかった。[12]

これは、敦煌莫高窟や河西回廊の武威、張掖、酒泉石窟にみられる塑造仏とその造形方法と共通するものであり、統一新羅時代に敦煌莫高窟と同様の塑造仏が造られていたことを示す。記事による「木造」という記述は所謂木組構造を示しており、有芯塑像である。更に「土と違う材料」とは土を強固にする寸莎のことであり、表面に彩られた「黄色や緑系統の彩色」は、敦煌莫高窟と共通する色彩とみられる。これは塑像において確立された敦煌様式造仏方法の朝鮮半島への東漸であり、制作手順や材質選択も全てマニュアル化されたものが伝わり、更に朝鮮独自の造形様式も加味されたものである。

この塑造仏の出土は､朝鮮半島三国時代以後の統一新羅における仏教の興隆を証明しており、中国から仏教教義や経典と同時に、各種仏像の造像方法及び技術が伝授されたものである。朝鮮半島の仏像は、現地で採取可能な素材を用いてはいるが、中国で制作されてきたものと同様

の素材と技法を用い造像されているはずである。それらは石彫仏であり、金銅仏、壇像的木彫仏、塑造仏、脱活乾漆仏などである。しかし、朝鮮半島において木彫仏と脱活乾漆仏の現存例はほとんどない。前者は木であり、後者は木製木組みに漆と麻布で形成されており、可燃性を帯びている。その為、不運な火災や戦乱、李氏朝鮮時代による廃仏政策等で脆くも焼失したか、軽量で運搬に適しているので、その多くは朝鮮国外に渡ったものと思われる。

塑造仏は大型になると、他の素材と比較しても運搬には向かない。統一新羅となってから1400年もの長い年月が経過しているが、人災や自然災から免れた塑造仏だけが運良く現存しているに過ぎない。小型仏であれば現存の可能性は高いが、大型であれば低くなる。唐代においても、手軽に制作可能な小型塑造仏は比較的数多く造られていたようである。８世紀中期に唐の高僧・鑑真和上が、日本に渡航する予定であった第二回渡航計画の請来品の品目の中に「金漆泥像一躯」とあるが、おそらく塑造仏であるとみられる。十分乾燥した有空塑像[13] に漆を塗り、金箔を箔押ししたものである。これら唐における塑造仏の制作は統一新羅にも伝わり、多くの塑造仏が制作されたものと思われる。

朝鮮半島における仏像に関しては、以後、出土或いは発見されるであろう多くの仏像に期待される。

２、日本における仏教文化の受容

(1) 朝鮮からの仏教文化受容

遣唐使（630年～894年）派遣による唐の先進仏教文化の輸入に先駆け、日本における仏教文化の受容は、南北朝を介した朝鮮半島三国から始まった。これら朝鮮三国からの仏像献上に関して、久野健氏は次のように述べている。

> （中略）朝鮮三国からの仏像献上の記事は、書紀などに散見する。敏達六年には、百済王が経論、および律師、禅師、呪禁師、造仏工、造寺工など六人を送ってきた。わが国では、これらの人々を難波の大別王寺に住まわせ、それぞれの特技を発揮させた。また同八年頃には、新羅から仏像が献上され、同一三年には、百済から帰朝した鹿深臣（元興寺縁起では甲賀臣）が弥勒の石像一躯を持ちかえり、また佐伯連も仏像一躯を請来したという。このうち、鹿深臣が持ちかえった弥勒石像は、曽我馬子が引き取り、初め石川宅に安置したが、元興寺を造営するにおよんで、そこの初めの本尊となったものではないかと私は考えている。この馬子の元興寺（飛鳥寺）の建立に際しては、百済から、仏舎利および僧と共に寺工、瓦博士、画工、露盤博士などを招き、崇峻元年（588）からその造営が始まった。同五年には仏堂と歩廊とが建てられ、推古四年（596）にはその主要堂塔の建設がおわり、僧を住まわせたという。この元興寺造営の際には、高句麗の大興王から、黄金三二〇両が造営のために送られてきたことが元興寺縁起に収録する丈六光銘に記されている。[14]

このように敏達６年（577年）から推古４年（596年）における20年の間に、朝鮮三国の百済、新羅、高句麗から仏教に関する多くのものが伝えられた。日本の初期仏教文化の受容は、朝鮮三国の指導によるものであったことをよく示している。文中の百済から帰朝した鹿深臣が持ち帰った弥勒の石像とは、当時流行していた半跏思惟像であったと考えられる。百済における仏教の系統は「南朝仏教」であることは先にも述べたが、南朝の仏像の特徴である「秀骨清像」の趣を有していたであろうし、「氏族仏教」であることを考慮に入れると、仏像の大きさは約30センチ以内の念持仏程度の大きさであったと思われる。

「国家仏教」において造像された仏像は、丈六仏等が制作可能な規模の大きな造仏所で造ら

れたであろうし、熟練した仏師及び多くの工人達の手による組織的なものであった。よって「国家仏教」による造仏は、既に実践された造像方法及び造形様式の踏襲から始まり、その国独自の様式を確立するには長い時間が要される。大事業の遂行には綿密な計画性が必須であり、統治者である王や皇帝の指示により、その要望を受け造像された仏像もあるはずであろうが、急激な造形様式の変化はあまりない。「国家仏教」による仏像の様式は、時間をかけて徐々に変化してゆく。

「国家仏教」による仏像制作の状況と比較して、「氏族仏教」による仏像制作とはいかなるものであったのか。「国家仏教」による造仏が国家による組織的で大規模なものであったのに対し、「氏族仏教」による造仏は個人による私的で小規模なものであったと考えられる。30センチ程度の念持仏であれば、仏師一人でも制作可能である。おそらく百済における多くの貴族達は、幾つかある小規模単位の個人開業仏師に発注、或いは既成の仏像を買い求めたのではないかと考えられる。しかし、当時それら仏像は高価なものであったことは確かであり、仏像を制作する仏師の地位も優遇されていたと思われる。そして仏師達も仏教教義による仏像容姿の必要条件内において、個人の造形感覚を生かし、自由な創作を可能にしたと考えられる。そうでなければ、南梁の仏像にはみられない百済独特の細身のＳ字型仏像も生まれなかったはずである。よって、百済の「氏族仏教」による仏像制作とは、朝鮮半島における新たな朝鮮様式の誕生を意味し、以後日本の飛鳥時代の造仏にも影響を与えることとなる。

(2) 遣隋使期の造仏

北周の武帝による仏教の廃毀で失われた仏教寺院や仏像は、隋の文帝の即位（581年）と同時に大いに復興した。僧尼を度すこと230,000人、寺院の建立が3,792ヶ所、書写の経論は132,086巻、諸仏像の制作が106,580躯、故像の修理が158,940躯余りにおよんだ。隋の文帝は、漢の時代以降都になっていた長安の東南に大興城を造築し、102の寺を建立した。そこに「国家仏教」、すなわち「伽藍仏教」の盛観をみる。

遣隋使は600年から614年の間に４回を数える。「随書」倭国伝による倭国の仏教事情については「於百済求得仏経（仏教を敬す、百済において仏教を求得す）」と記されていることから、倭国の遣隋使が百済を経由して隋に赴いていたことを示している。[15]

第二次の小野妹子を大使とする遣隋使の派遣（607年）は、倭国における「仏教興隆」を隋の皇帝に報告する目的であったようである。法興寺（現・飛鳥寺）の本尊・釈迦如来坐像（飛鳥仏）は、小野妹子の帰国と共に来倭した隋の大使・斐世清ら13名を法興寺に招き入れた年（608年）に完成した。[16] 丈六仏である釈迦如来坐像は、朝鮮半島からの帰化系である鞍作止利の作によるとみられる。仏像を新たに制作する際、常に当時流行の先端デザインを取り入れるはずであり、尚且つ仏像の威厳と伝統的風格を保持しながら、権威のある様式を採用し制作する。飛鳥仏は、法隆寺金堂・釈迦三尊（623年）と同様の北魏様式の特徴を以って造形されていることから、当時は北魏仏教いわゆる「国家仏教」を以って仏教興隆を推進していったものと思われる為、仏像の造形も北朝のスタイルを採用したものと言える。鞍作止利の祖父である司馬達等の出身地である朝鮮三国において、既に「国家仏教」として伽藍や仏像を造っていた高句麗と新羅、初期「氏族仏教」であった百済も次第に「氏族仏教」と並立しながら最終的に「国家仏教」となった。

隋の建国以後、仏教の復興により多くの造寺造仏が成されたが、北魏様式から更に発展し変化した造形であるとみられる。飛鳥仏は隋の建国から17年後、遣隋使派遣開始から８年後の完

成であり、法隆寺金堂・釈迦三尊の造仏に至っては既に隋は滅亡し、国が唐に代わってわずか５年目の頃である。これまで百済を中心とする朝鮮三国から間接的に仏像造像方法は伝わっていたが、遣隋使の派遣により、隋代の仏教及び仏像に関する最新事情や知識が直接日本に伝わることとなった。止利仏師の手掛けた飛鳥仏や法隆寺金堂・釈迦三尊にみられる北魏様式の様相は、仏教先進国であった隋や朝鮮三国の影響を受け造仏されたものであり、新しい仏像を制作するにあたっては、自ずとこれら諸仏教先進国で造仏された最新のスタイルを採用するはずである。これは「国家仏教」による国の統治を対外的に宣言するものであり、第二次遣隋使派遣が、倭国における「仏教興隆」を隋の皇帝に報告する目的であったことからみても理解できる。倭国において、この時期に造仏された現存する仏像の様式の大部分、いわゆる「国家仏教」としての普遍的権威を象徴する「北魏様式」の仏像が、当時仏教が復興した隋や唐初、朝鮮三国における造仏の主流であったということになる。

(3) 遣唐使期の造仏

a、白鳳期

遣隋使に引続き、唐朝成立以後も倭国は継続的に使節を派遣した。遣唐使は唐成立（618年）から18年後の630年に開始され、唐滅亡（907年）の69年前にあたる838年の派遣を最後に200年余に亘って継続し、唐の先進文化を吸収した。894年に派遣計画があったものの、大使・菅原道真の上奏により結果的に停止し、以後遣唐使の派遣がないまま唐は滅亡する。９世紀後半の唐は、859年の裘甫の乱や868年の龐勛の乱に代表される反乱が各地で起きた。874年ごろから黄巣の乱が起き、唐は混乱し、その国力が低下していたことがその大きな理由である。更に、国費を投じる遣唐使を派遣せずとも、多くの商船が頻繁に唐と日本[17]を往来しており、常に唐の最新情報や物資が日本に入るようになっていた。これにより、あえて遣唐使を派遣する必要性が消失したことも挙げられる。[18]

これまで仏教教義及び造仏方法の情報は主に朝鮮半島から伝えられてきたが、遣隋使及び遣唐使の派遣により、一層中国大陸の先進的な仏教教義及び新しい仏像の様式や造像方法が日本に伝わった。その大きな仏像様式の変革期が白鳳期の造仏である。白鳳期とは、日本美術史による区分であり、奈良時代前期にあたる。開始時期について諸説あるが、おおよそ古代天皇制である大化の改新（645年）から平城京遷都（710年）の時期を指す。[19] この時期の東アジア国際情勢は、唐朝が最盛期に入り、朝鮮半島においては百済が唐軍の攻撃により滅亡、更に倭国及び百済の遺民の連合軍と唐及び新羅の連合軍が一戦を交えた白村江の戦い（663年）が起こる。後に高句麗も滅亡し、新羅が朝鮮半島を統一した。白村江の戦いで倭国は敗れたが、その４年後には第６次遣唐使が派遣されている。これは唐との早期の関係改善を求めたものと思われる。その後、第７次（669年）、第８次（702年）と集中的に遣唐使を派遣している。

白鳳期を代表する仏像として挙げられるのは、奈良興福寺に収蔵されている旧山田寺の仏頭や、薬師寺東院の聖観音立像及び金堂の薬師如来坐像・脇侍日光月光菩薩立像に象徴される、ふくよかで丸みを帯びた立体的表現によるものである。止利仏師による観念的な「北朝様式」的造形感覚とは異なり、人間的な「南朝様式」的造形感覚で表現されている。この造形様式の大きな変化は、当時の倭国における国内情勢と関連している。当時の倭国と百済は、任那を介した相互の利害の一致により、友好な関係が結ばれていた。百済は新羅との関係が悪化し、後に滅亡する。白村江の敗戦の後、百済復権運動に終止符がうたれ、亡命を求める多くの百済人が倭国に受け入れられた。665年２月に、百済の百姓男女400余人を近江国神前（滋賀県東南部）

に住まわせ、翌年冬には、百済の男女2000余人を東国に置いた。百済の滅亡により、本国を棄て倭国に亡命帰化した人々である。[20] この状況は、様々なかたちで倭国の政治や社会、そして文化にも少なからず影響を与えたものと思われる。

亡命百済人の中には様々な分野において、指導的な役割を担っていたと思われるが、造仏に関しても同様な立場を持つ仏師達が存在したのではないかと思われる。本来百済は、南朝に影響された「氏族仏教」が原点にあり、以後継続して貴族の間で念持仏を自宅に安置し信仰されていたであろうし、南朝様式独特の「秀骨清像」が更に発達したものとして、インドのグプタ様式にみられる人間味溢れる要素を取り入れた、丸みのある滑らかな仏像様式に定着していったものと考えられる。日本における白鳳期の仏像とは、日本人独自の造型感覚と、これら百済の「南朝様式」系統を取り入れた形状として確立されたものと思われる。時を同じくして、唐においても次第に「北朝様式」の観念的な造形から、「南朝様式」にみられる人間性を表した造形に移行していった。

白鳳期における遣唐使の評価は、唐による律令制を取り入れた天皇による律令体制に伴う国家仏教確立の促進と、飛鳥期とは異なる新たな仏像様式の完成といえる。

b、天平期

天平期とは前述の白鳳期と同様の日本美術史における区分であり、奈良時代後期にあたる。710年の平城京遷都から、794年の平安京遷都までを指す。この時期の遣唐使は、第９次遣唐使（717年）から、第17次遣唐使（779年）まであり、62年間で９回を数え、ほぼ安定的に派遣されている。天平期の代表的な仏像として挙げられるのは、東大寺の金堂・銅造盧舎那仏坐像及び法華堂・脱活乾漆不空羂索観音立像、塑造日光月光菩薩立像、戒壇院・塑造四天王立像、興福寺・脱活乾漆八部衆像及び十大弟子像、新薬師寺・塑造十二神将立像、唐招提寺の金堂・脱活乾漆盧舎那仏坐像及び木心乾漆千手観音立像、木心乾漆薬師如来立像、そして脱活乾漆鑑真和上坐像他、数多くの逸品が現存する。この天平期において銅造や塑造の他に、新たに多く用いられた造像方法が脱活乾漆である。特に脱活乾漆像はこの天平期に集中的に制作されている。

日本の天平期におけるこのような状況は、同時に唐における造像方法としての脱活乾漆の価値評価に伴い、実制作として大量に造られたことを意味する。武周朝（690年～705年）時代、武則天が懐義に夾紵（脱活乾漆）大仏像の制作を命じた[21]ことでも示されるとおり、当時としても非常に高価な漆を用いた脱活乾漆は、国家の威厳誇示に十分対応できる造像方法である。国家仏教として造像される仏像は、常に巨大なものが要求された。雲崗や龍門における巨大な石仏は、その岩山の立地する場所が山岳地帯に限られており、当時100万人の人口を有したといわれる長安の都からは距離がある。平地である首都において巨大な仏像を制作することについて考慮すると、塑造には構造的限界があり、銅造には貴重な銅調達の困難さや、制作工程による危険が伴う。しかし脱活乾漆については、制作工程に関して安全性が高く、漆木を大規模に植樹すれば生漆の大量生産が可能になる。移動も容易であることなど様々な利点が考慮され、脱活乾漆による造仏が流行したものと考えられる。当時、遣唐使として派遣された大使ら官僚や留学僧達は、脱活乾漆による巨大な仏像を目の当たりにしたであろうし、この造像方法を日本に取り入れようと考えたと思われる。その結果、天平期における脱活乾漆造像が集中的に制作されたと考えられる。

しかし、754年の鑑真和上の平城京入京を境に、漆を用いた造仏は脱活乾漆から木心乾漆へ移行し、更に鑑真和上がもたらした前衛仏教である密教及び壇像による新たな仏像概念が、日

本独自の木彫仏へと展開してゆく大きな変革期へと向かわせた。天平期における遣唐使の評価は、唐の造仏に関する最新情報の収集とその実践や、鑑真和上による仏教美術の新たな価値と方向性の構築であるといえる。

遣隋使年表[22]

使次数	出国年	使節名	帰国年
1	600年	不明	不明
2	607年	使：小野妹子 通事：鞍作福利	608年
3	608年	使：小野妹子 使：吉士雄成 通事：鞍作福利	609年
4	614年	使：犬上御田鍬 使：矢田部造	615年

遣唐使年表[23]

使次数	出国年	使節名	帰国年
1	630年８月	使：犬上三田鍬耜 使：薬師恵日	632年８月
2	653年５月	大使：吉士長丹 副使：吉士駒	654年７月
	７月	大使：高田根麻呂 副使：掃守小麻呂	遭難
3	654年２月	押使：高向玄理 大使：河辺麻呂 副使：薬師恵日	655年８月
4	659年７月	大使：坂合部石布 副使：津守吉祥 伊吉博徳	661年５月
5	665年	送唐客使：守大石・坂合部石積・吉士岐弥・吉士針間	667年11月
6	667年	送唐客使：伊吉博徳 笠諸石	668年
7	669年	河内鯨	不明
8	702年６月	執節使：栗田真人 大使：高橋笠間 副使：坂合部大分 大位：巨勢邑治 少録：山上憶良	702年７月：栗田真人 707年３月：巨勢邑治 718年10月：坂合部大分

9	717年	押使：多治比県守 大使：大伴山守 副使：藤原馬養	718年10月
10	733年	大使：多治比広成 副使：中臣名代	734年11月：第一船 736年５月：第二船 739年：第三船
(11) 任命	746年	大使：石上乙麻呂	停止
12	752年	大使：藤原清河 副使：大伴古麻呂 吉備真備	754年12月：第三船 754年：第二船 754年４月：第四船
13	759年	迎入唐大使使：高元度	761年８月
(14) 任命	761年	大使：仲石伴 副使：石上宅嗣 藤原田麻呂	船破損のため停止
(15) 任命	762年	送唐客使：中臣鷹主 副使：高麗広山	７月、風波便なく渡海できず停止
16	777年６月	大使：佐伯今毛人 副使：大伴益立 藤原鷹取 小野石根 大神末足	778年10月：第三船 778年11月：第一船、第二船、第四船
17	779年	送唐客使：布勢清直	781年
18	804年７月	大使：藤原葛野麻呂 副使：石川道益	805年６月：第一船、第二船 806年：第四船？
19	838年６月	大使：藤原常嗣	840年：第二船
(20) 任命	894年	大使：菅原道真 副使：紀長谷雄	大使菅原道真の上奏により停止

＊…この年表は、森克己著「遣唐使」、江上波夫編「遣唐使時代の日本と中国」、東野治之著「遣唐使船 東アジアのなかで」を参考にした。

(注)

1 「飛鳥・白鳳仏教史　上」田村圓澄著　吉川弘文館　1994年　p.27
2 同上「飛鳥・白鳳仏教史　上」 p.32
3 「日本上代の彫刻」望月信成著　創元社　1943年　p.49
4 朝鮮半島において、４世紀の三国時代から14世紀の高麗時代まで多くの様々な仏像が制作されたと思われるが、李氏朝鮮の儒教政策により徐々に仏教弾圧がエスカレートし、多くの仏像が破壊された。
5 同上「飛鳥・白鳳仏教史　上」 p.36

6　同上「飛鳥・白鳳仏教史　上」 p.34～35
7　S字型の側面姿勢は、南梁系である法隆寺百済観音菩薩像において顕著に表れている。
8　「百済の仏像が鞠智城跡から出土、築城指導の亡命貴族持参か」 読売新聞　2008年11月4日
9　「古代朝鮮と日本仏教」田村圓澄著　講談社　1985年　p.165～166
10　同上「飛鳥・白鳳仏教史　上」p.189
11　「千年佛雕史」季崇建著　芸術図書公司　1997年　p.106
12　©Innolife & Digital YTN & Joynews24 & inews24　2009年2月19日㈭
13　本論「第六章　鑑真和上と天平彫刻　第一節　鑑真和上来朝　3、第二回渡航計画時の将来品「泥塑」」参照。
14　「古代朝鮮佛と飛鳥佛」久野健著　山川出版社　1979年　p. 5
15　同上「飛鳥・白鳳仏教史　上」p.139
16　2008年4月8日、日本最古の寺院・飛鳥寺の本尊、飛鳥大仏（金銅丈六釈迦如来坐像）の開眼1400年を記念した供養が行われた。
17　古代日本を中国歴代王朝や朝鮮三国が倭国と呼んでいたが、7世紀後半の大化の改新以後日本と称するようになる。
18　「遣唐使時代の日本と中国」江上波夫編　小学館　1982年　p.121
19　「日本の美術　飛鳥・白鳳彫刻」上原昭一編　至文堂　1968年　P.63
20　同上「飛鳥・白鳳仏教史　上」p.267
21　「中國的佛教」潘桂明　台湾商務印書館　1993年　p.53～54
22　同上「飛鳥・白鳳仏教史　上」の「表7　遣隋使一覧」参照　p.138
23　「遣唐使船　東アジアのなかで」東野治之著　朝日新聞社　1999年　の「遣唐使の一覧」参照　p.28-29